

日本語作文のフィードバック —添削と文法を越えて—

中川正弘

0. はじめに

作文練習として書いたものが教師によって添削され、返却されると、学習者はそれを見て考える。書き終えた時点ではすべて正しく、間違いはないと思っていただろう。その時点で間違いがあると自覚できていれば他の書き方をしていたはずだからだ。ところが、間違いがあると指摘された。添削によって間違いは正されたことになるのだが、果たしてそれで終わりだろうか。朱を入れられたところはただ言葉が違っていただけを知らせているのではなく、その言葉に関して何か問題があることを指摘している。

抹消や書き換えは、そこに見える言葉についてだけでなく、その言葉の使用の背後にある文法や意味の理解における問題、また学習法の問題にまで及んでいる可能性がある。従って、その指摘がどのようなものであるか、作文を書いた者がじゅうぶんに理解し、記憶にとどめることができれば、同じ原因から生じる可能性のある多くの間違いを以後抑えることができる。言葉を使う能力を補正するには間違いの根っこにあるものを知らねばならない。

しかし、自分の書いた表現と書き直された表現を見ただけでは、「間違っている」という判定と「正しい書き方」を突きつけられたように感じやすい。間違いからどれだけのことを学習するかは書いた者が自発的に行う分析や解釈にかかっている。しかし、どれほどのがそこから学べるだろうか。分析、解釈を行うのは、作文を書いた時点で、その間違いに関わる文法や意味の理解がじゅうぶんではなかった学習者である。

通常、添削によって現れる正しい言葉、語法は一つだけだ。だが、添削者は添削の過程で最終的に選んだもの以外にさまざまなことを考えているものだ。それは他の書き直し方に限らない。間違いと判断される言葉が正しく使えるために、また書き直しのために選んだ言葉が正しく使えるために前提条件として知っていなければならないさまざまなことを想起し、思い巡らしていることも多いだろう。

作文が有効な学習法であるためには、添削文の陰に隠れたこのような思考ができるだけ学習者にフィードバックされるべきだと考え、これを柱とした授業の設定について以前論じた¹⁾。しかし、そこでは方針の確認や授業の設定についての考察を主眼にしたため、添削に関わる思考が実際どれくらい広がり、それをどのように扱えるかについては軽く触れただけだった。

本論では、これまでに筆者が扱った作文のフィードバックの事例から、誤用の分析と提示について考えたい。

1. 書き換えの選択肢と問題の解釈

A 私は留学生として日本に来た。

- 日本語が下手ですから、むずかしい点がたくさんある。
- 日本語が下手だから、困ることがよくある。
- 日本語が下手なので、困ることがよくある。
- 日本語が分からなくて、困ることがよくある。【●は原文／○は書き直し】

ここでは文体を整えるために、理由節において「です」を使わなくする。「ですから→だから」と直すだけでも見える。しかし、「来た→下手です→ある」と文末形を交替させている学習者は、そのような書き直しを見ても、文末のスタイル²⁾を合わせ忘れていたから、揃えなければならないのだ、とは考えないだろう。

A' 私は留学生として日本に来ました。

- 日本語が下手ですから、困ることがよくあります。
- 日本語が下手だから、困ることがよくあります。
- 日本語が下手なので、困ることがよくあります。

A' に見るように、同じ内容がです・ます体で書かれた場合には、「下手ですから」と「下手だから／下手なので」のどちらも使えるが、このような従属節では主節とスタイルを変えて、「だから／なので」を使うのが普通だろう。「ですから」だと丁寧すぎると感じられることが多い。外国人学習者が二つのスタイルを一見無秩序に交替させるようになるのは日本語がこのような構文において二つのスタイルを組み合わせたのを真似するからだろう。

従属節を除き、「日本に来た」と「たくさんある」を見れば「文体の統一」は考えられているようだ。すると、従属節の「下手だ」も合わせ、三カ所とも同じスタイルで統一することを考えた可能性もある。そのほうが簡単なはずだ。ところが、この書き手は、この構文において二つのスタイルを組み合わせねばならないとまで考えたのではないだろうか。

この例で問題なのは文体の統一ではない。「です／ます」と「だ／する」の二つのスタイルの位置づけだ。問題は文末形を合わせていないのではなく、二つのスタイルの「序列」を認識していないことだろう。日本語教育では日本語を書くときの文体の選択肢として丁寧体（です・ます体）と普通体（だ・である体）を対等に扱う。しかし、自然に日本語を習得した日本人には言うまでもないことだからだろう、発言や文章化に先立つ思考段階の日本語のスタイルがどんなものであるかについては言及しないようだ。国語教育で日本語を教えられる前にすでに日本語で考え、話すことができる日本人に規範として示す文法はそれでいいのだが、日本語をまったく知らない状態から日本語で話せ、考えられるよ

うになることを目標にする外国人は「文体以前の日本語」について考える必要がある。

普通体の文章で「です・ます」が連体節に現れたりはないが、です・ます体の文章では「だ・する」が組み合わされて出てくる。それは普通体が内言語のスタイルそのままに近く、です・ます体は表現要素が付加され、丁寧化された外言語のスタイルだからだろう。日本人は日本語の自然な習得の過程を序列に変換し、「普通体→です・ます体」と感じているのだが、外国人学習者はです・ます体の日本語で習い始め、しばらくしてから辞書形として終止形「する」の形を教えられるため、序列の感覚が「です・ます体→普通体」と逆転し、「です・ます体」が本来のもの、「普通体」はそれを略したものと感じているか、そんな序列の感覚がまったくなかったりするようだ³⁾。

「普通体」という命名を「丁寧体」という命名と対比するだけでは作文、発話における言葉のスタイルの選択肢として二つを同等のものとして並べただけだ。日本人が日本語を習得する時のスタイルの順序、独白と対話の対立にも通じる内/外（内言語/外言語）の感覚までは表さない。丁寧体を使っている場合も、発話の前段階における思考は普通体であること、だからこそ「普通」なのだということを学習者に理解させなければならない。

次に、「むずかしい点がたくさんある」だが、ここでは「むずかしい」という一見中核となる言葉を残そうとするよりは、書き手がこの言葉で表そうとしている「日本語が充分使えない」ために生じる状況を考えねばならない。そのような状況に関わる語彙、同じ形容詞では「つらい/大変な/不安な/・・・」、名詞では「困難/問題/不可能/・・・」、動詞では「困る(困った)/できない/・・・」などが思い浮かぼうが、これらの中でもっとも現れやすいのは「困る(困った)」という動詞であろう。

何か問題に出会うと、日本人なら十中八九「困った」という言葉が頭に浮かぶ。日本に来たばかりでこちらの生活に慣れていない留学生がいれば、「何か困ったことがあったら、いつでも来なさい」と言ったりする。同じ状況を他の動詞、また形容詞や名詞で表せなくはないが、このような状況に対する日本人の認識のあり方、反応の仕方を端的に表す言葉はやはりこの動詞だろう。

ただし、形容詞と動詞で品詞が違うと言っても、英語とは違い、日本語では語順、構文が二つの品詞で違ってくるわけではない。連体接続で位置も同じなら、否定形が「～ない/～なかった」と形容詞と動詞で共通だ。そのため、形容詞の言い換えや反意語が動詞となったり、逆に動詞の言い換え、反意語が形容詞になることも多い⁴⁾。西洋言語の品詞分類を翻訳し、形容詞/動詞と区別して使っていても、用法から見れば同じになってしまう日本語文法のこのような特徴に学習者の注意を促す機会も欲しい。

次に、「日本語が下手」について考えてみよう。日本語として間違っているわけではないので、そのままでもいい、書き換える必要はないと考える人が多いだろう。しかし、この

正しい日本語を使ったのが日本人ではない場合はどうだろうか。日本人は、例えば「英語が下手」と言うとき、英語の総合能力が劣るといふより、能力を二つに分け、発音が下手、字が下手、作文が下手のように言葉を自分から使うことを考え、聞いて理解することができないこと、読んで理解することができないことは普通含めない。理解する能力と発話する能力がまったく別というわけではないが、発音や字の書き方、作文が下手でも、自分は充分理解する能力があると感じている日本人は少なくないようだ。その言語が使えない、つまり、話すことも、発音することもできないし、聞いても、読んでも分からないと考えていけば、「下手」ではなく、「できない」か「分からない」を選ぶだろう。

「～語が下手」は字義通りの意味だけではなく、「ちょっと使えるのだが」のような考えをほのめかしていることも多い。言葉の字義通りの使い方は文法で考えるだけでいいが、言外の意味が含まれる表現は文法の視点から見ただけではなく、修辞学、文化コードの視点からも考えるべきだろう⁵⁾。

この文を書いた外国人が、読んだり、聞いたりするのは大丈夫だが、話したり、書いたり充分できないだけだと思っている場合もなくはない。それならば、「下手」のままでもいい。しかし、能力が総合的に低いと思っている場合、これでは相応しくないことを知らせるべきだ⁶⁾。

2. スタイルを作る要素

B●私の趣味は友達を集めることなのだから、日本の中でもいっぱい友達を作りたいです。

○私の趣味は友達を作る ことだから、日本でも 友達をいっぱい作りたいです。

○私は趣味が友達を作る ことなので、日本でも 友達をいっぱい作りたいです。

ここでは理由を表すということでは間違いではない「なのだから」を「だから」か「なので」と書き直すことになる。しかし、どうしてだろうか。「だから」よりも強い断定を含むだけだ。

「から」と「ので」は単純な理由の表現として、この例に見るように、どちらを使おうと変わらない。詳細に用例を比較して、どちらか一方しか使えない場合を示し、「から」と「ので」の微妙な違いを説明したとしても、その違いがこのような理由を表す大多数の使用例においても微妙な意味の違いを表すとは思えない。二つは同義表現と見なせ、その差は実際の情報伝達においては無視できるだろう。どちらも英語に翻訳すれば because となるだけだし、because を日本語に訳すのにどちらが使われても間違いにはならないのだから。

しかし、意味の違いが実用上区別できないと言っても選ぶことにまったく意味がないわけではない。会話で何度も繰り返し出現することも多いごく単純な理由を微妙な違いにこ

だわって「から」か「ので」かとその度毎に選ぶ人はまずいないだろうし、でたために交替させることもないだろう。どちらかをいったん選んでいると、何か交替させる理由がなければ、普通同じものを繰り返し使う。交替させる必要を感じるの、理由節の中に理由節を置かねばならない場合とか⁷⁾、その理由を強調するために調子を変えたい時ぐらいだろう。

すると、あまり自覚されないだろうが、この選択もスタイルを作ることになり、「です・ます／だ・する」の選択に通じるものを感じられる。

理由・・・理由・・・理由・・・理由・・・理由・・・
スタイル1 ので → ので → から → ので → ので →
スタイル2 から → から → ので → から → から →

このように言うと、そんなことはない、二つはいつも入り交じって出てくると反論されるかもしれない。確かに、どちらかを基準として統一しなければならないという規則はないのだから、実際にはどうして交替させるのか自覚のないままに交替させることもありうる。しかし、理由を一つの文章で何度も出す必要がある時、二つ目以降どの回にも言えることだが、先行する理由と同じものを使わず、交替させるには何か動機が要る。

Bの「なんだから」の書き換えで「だから」と「なので」のどちらか一方でなければいけないと考える人はいないだろう。どちらを選んだにせよ、これに続く文章で次に理由を表さなければならないとき、スタイルに一貫性を持たせようとして、あるいは「惰性的に」同じものを選ぼうとするのが自然だ。そして、書き手が敢えて替えた場合だが、読む者はそこで替わりに使われたものの微妙な意味の違いまでは理解できない。意味を感じるとすれば、その交替という行為自体にであらう。

理由を表すことばの間で交替があるとき、どんな動機があるのだろうか。以下の例文で考えてみよう。

- | | | |
|--------------|-------------------|---------------|
| ○私達は友達で、 | アパートの部屋も隣同士です。 | 【単純接続】 |
| ●私達は友達なので、 | アパートの部屋も隣同士です。 | 【単純接続】 |
| ○私達は友達で、 | 思ったことは何でも言います。 | 【理由： -1 / -2】 |
| ○私達は友達なので、 | 思ったことは何でも言います。 | 【理由： 0 / -1】 |
| ○私達は友達だから、 | 思ったことは何でも言います。 | 【理由： +1 / 0】 |
| ●私達は友達なのだから、 | 思ったことは何でも言います。 | 【理由： +2 / +1】 |
| ●私達は友達なので、 | 思ったことは何でも言ってください。 | 【理由： 0 / -1】 |

○私達は友達だから、思ったことは何でも言ってください。【理由：+1 / 0】

○私達は友達なのだから、思ったことは何でも言ってください。【理由：+2 / +1】

「で」は単純接続で使うものだから、それ自体で理由を表すと考えるより、接続する節同士の意味関係自体が理由を表し、せいぜい他の特別な接続形式が来る可能性を退ける機能ぐらいしか持っていないと考えたほうがいいだろう。

「なので」は「で」に強意が加わっただけのようだが、単純接続には使えない。「で」と違って、理由を明示する。しかし、理由の強調が必要となる三段目では、これでは不十分なようだ。

「だから」も「なので」と同様、それ自体で理由を表現する。そして、「ので」が使えない、理由が強調されねばならない場合に使われるということは明らかに「ので」より強意だ。

「なのだから」は「だから」に断定が加わって強度が増し、単純な理由としては使われない。一般に断定を表す要素を加えることは文法規則として禁じられるわけではない。文章作法として断定の過剰な使用は控えるように勧められるぐらいだ⁸⁾。つまり、これは文法の問題ではなく、文体、スタイルの問題だということだ。赤塚不二夫のマンガに出てくる「バカほんのパパ」の口調は特異ではあっても、文法違反とは思われず、一つのスタイルとして日本人に受け入れられている。このようなことは、文法と修辭的事象の線引きの難しさを示しているとも見えるが、本来この二つの領域は断絶しているわけではないのだから、文法を修辭的視点から見たり、修辭法を文法の視点から見たりすることが必要だろう。

「から」と「ので」だけでなく、これらの書き換えにおいて選択肢となる「で」や「なのだから」をこのように並べると、行末に数値化したように表現として強度の差が見えてくる。数値を二列で示したように「ので」も「から」も零度(標準)になりえるが、筆者は零度を「ので」に置いて使うことが多いと自覚している⁹⁾。

次に見るのは筆者が書き直した作文例だが、ここでは「ので」が零度(標準)となっている。

1カ月前、友だちがテレビをくれたので、最近よく見ている。日本はわたしの国よりテレビのチャンネルが多い。チャンネルが6つもあるので、見るものがいろいろ選べる。ドラマ、クイズ、スポーツなど、おもしろい番組はたくさんある。

日本語の練習をするために一番いいのはニュースだろう。しかし、話し方が速いので、わたしにはほとんど聞き取れない。それより難しいのは時代劇だ。サムライが使う昔の言葉は今の日本語とぜんぜん違うからだ。

クイズもおもしろいが、何を話しているか分からないことが多い。ドラマは、同じような話が多いし、普通の日本語ばかりなので、だんだん分かるようになってきた。

わたしがもらったテレビには副音声システムがついている。これがあると、ニュースや映画が日本語だけではなく、英語でも聞ける。日本語ばかり聞いていると疲れるし、外国映画を日本語版で見ると、とても変な感じがする**ので**、時々英語に切り替えて見ている。

イヤなことは一つ。コマーシャルが多すぎることだ¹⁰⁾。

ここで標準を「から」に移した場合、文法としての違いを感じる日本人はいるだろうか。自分自身のスタイルを基準として主観的に「堅い／柔らかい」とか「強い／弱い」と感じるぐらいだろう。

1カ月ぐらい前、友だちがテレビをくれた**から**、最近よく見ている。日本はわたしの国よりテレビのチャンネルが多い。チャンネルが6つもある**から**、見るものがいろいろ選べる。ドラマ、クイズ、スポーツなど、おもしろい番組はたくさんある。

日本語の練習をするために一番いいのはニュースだろう。しかし、話し方が速い**から**、わたしにはほとんど聞き取れない。それより難しいのは時代劇だ。サムライが使う昔の言葉は今の日本語とぜんぜん違う**のだ**。

クイズもおもしろいが、何を話しているか分からないことが多い。ドラマは、同じような話が多いし、普通の日本語ばかりだから、だんだん分かるようになってきた。

わたしがもらったテレビには副音声システムがついている。これがあると、ニュースや映画が日本語だけではなく、英語でも聞ける。日本語ばかり聞いていると疲れるし、外国映画を日本語版で見ると、とても変な感じがする**から**、時々英語に切り替えて見ている。

イヤなことは一つ。コマーシャルが多すぎることだ。

同じことは「条件」についても言える。

- ・明日雨が降ったら、家にいます。
- ・明日雨が降るなら、家にいます。
- ・明日雨が降れば、家にいます。
- ・明日雨が降ると、家にいます¹¹⁾。

このようなある状況で同義としか思えない文に出会うため、外国人学習者が「たら」と「なら」はどう違うのでしょうかとよく質問する。すると、違いが問題だと理解し、「たら」と「なら」の用法の重なり合う部分ではなく、他のものが使えないそれぞれの固有の用法の説明で答えようとする。しかし、どうだろう。質問はどちらも使えるとき、つまり用法が重なるときに何が違うのかを聞いている場合が多いのではないだろうか。

文法の詳細な解説では、同義的な「たら/なら/ば/と」の四つの言葉があれば、できるだけ細かく四つの使われ方を区別、定義しようとする¹²⁾。そして、これこれの場合にはこれが使えてもこれは使えないというふうに、用例を比較分析する。だが、最終的に示す

「使い分け」、分類は非常に錯綜したものになり、道を尋ねる者を迷路に連れ込むようなことになりかねないため、このような質問に対する答えとはしにくい。さらに、「関西方言では『～たら』がよく使われるなど方言差もあるので、注意が必要です」¹³⁾のように言い添えられると、方言を考慮に入れずに行われた分析の結果をそのまま絶対視することはできないと言われているようなものだ。

外国人学習者がどう違うのかと質問するのは、「どれを使ってもいい」と言われる反面、使ってみると、作文の添削で接続形の間違いを直すだけに留まらず、自分の選んだ言葉を書き換えられたりするからでもあろう。このような質問は、四つがどんな場合に違うかを問題としている場合も確かにあるだろうが、どれも同じように使えるとされるものの中から何を基準の一つを選ぶのが問題になっていると理解すべき場合が少なくない。一方、文法家はあくまで意味の違いを見極めようとする。方言差の存在が指摘されても、まるで方言のニュアンスまで解明し、これを組み入れなければ完全な文法としないと考えているかのようだ。

しかし、方言差が存在することは、言葉の選び方に感覚やスタイルなど、「主観」という因子が働いているということの意味している。だから、日本人は「どれを使ってもいい」、つまり「他の人の選び方が自分のものと違っていてもかまわない」と感じるのであり、全てを細かく使い分けようとはしていない。

文法解説の例文のように一つの文における四つの選択肢を比べるだけではこの選び方の問題の全体は見えない。四つの中からどれか一つを選ぶのは理由を立てても、自由(主観的)にでもいいのだが、その後、同じ文章中で次に「条件」が出てきたとき、同様にもう一度選び直したりはしないだろう。

たら → ば → と → なら → たら → ば → と → …

「条件」が出てくる度に選び直すとなると、話す場合も、書く場合も相当な負担になる。会話では表現が単調になるのを避け、変化を付けようとするよりは、その時選んでいるスタイル(「特別に丁寧/丁寧/普通/ぞんざい」のせいぜい四つ)を相手に伝え、自分でもそれを確認し続けるために同じものを繰り返すことが多いだろう。また、書く場合でも、単調になるのを避けるだけなら、零度のスタイル(基本となる表現)にもう一つの表現を時折混ぜれば充分だ。

です・ます体/だ・である体のスタイル選択はほとんど規範となっている¹⁴⁾。一方、「から/ので」、「たら/なら/ば/と」なども、規範とまではなっていないが、スタイルを作る要素として、くだけた会話(独り言)/敬語を使った会話/論文/…で使い分けられるようだ。このようにスタイルを作るものとしての意味を考えるには、理由では「ために/せいで/…」、条件では「～の場合は/時は/…」のような名詞型、漢語系のス

タイトルも比べるべきだろう。

「日本の中で」にも同様のスタイルの問題がある。選択肢としてこれと並び、同義と見なせる「日本国内で」や「日本で」と比べると、やはり強弱のようなものが感じられる。一般的に外国人の日本語がこのような強く、明瞭すぎると感じられるものを選ぶのは、使っている辞書(英和辞典など言葉を日本語に換えるために使う辞書)が強く、意味の明瞭な言葉をまず紹介し、日本人が普通に使うどちらかと言うと曖昧なスタイルを後にするか、省いてしまうからだ¹⁵⁾。語義の説明であればそのように配列されてしかるべきだが、辞書に頼る学習者は一番最初に示される言葉がまず使うよう推奨されていると感じるに違いはない。やはり序列が問題だ。

「友達を作りしたい」では過剰なひらがなを一つ削り、「作りたい」とするだけと見える。この書き手は「～たい」が正しく使えなかったのだろうか。そうではないだろう。「したい」と使っているということは「する→したい」の形成も頭に入っているようだ。それなら、「(あなたに) お作りしたい」という尊敬表現を対象となる人のいない文でも使うという間違いを犯し、おまけに、「お作り」と「お」が要るところを付け忘れたのだろうか。その可能性がないではない。しかし、少し違う解釈もできる。日本語に「お作りしたい」という表現があることを知っているが、そのまま使えば尊敬表現になってしまう。だから、「お作り」から「お」を取ればいい。「お作りする」という形成が文法的に正しいなら、「作りする」だって正しいはずだ。このように考えた可能性がある。すると、一見つまらないミスをする日本語がまだままだの学習者とも思えるが、実は、「作りたい」という単純な語法だけではなく、「お作りする」という尊敬表現も知っているレベルにあるのだが、記憶している表現を使うばかりではなく、文法を使い回して表現を作ろうとする学生だということになる。「お作りする」が使われるのに「作りする」がどうして使われないのかと質問されれば、どう答えればいいのか¹⁶⁾。

3. 言語感覚とスタイル選び

- 日本料理は思ったより まずくはなかったです。
- 日本料理は思ったほど まずく ありませんでした。
- 日本料理は思ったほど まずくはありませんでした。
- 日本料理は思ったほどはまずく ありませんでした。

否定の比較で「より」を使う人も少なくないが、「ほど」のほうが標準的だろう。添削を控えめにするなら、添削者の感覚で文体を統一するほど書き換えないだろうが、それでも二つは比べられるべきだろう。

「なかったです」と「ありませんでした」の書き換えはもっと微妙だ。日本語教育では形容詞を教えるとき、語形が規則的で扱いやすいため、「まずくありません／まずくありませんでした」より「まずくない／まずくなかった」を優先する。その結果、大多数の外国人学習者はこちらを標準として使うようになる。

しかし、日本人はどうだろう。「なかったです」が正しいとは思っても、「取って付けたような丁寧体」とか「学校で教えられるような丁寧体」とか、何か「不自然さ」感じて、避けようとはしないだろうか。「まずくなかったんです」とか「まずくなかったですよ」というふうにとひねりしたものには抵抗がないのだが、「なかったです」そのままでは何か引っかかる¹⁷⁾。

「まずくはなかった」の「は」は「対比」の用法につながるものだ。「まずく」に「は」が付加され、強調が置かれたことでこれと対比されるような内容の思念を暗示する¹⁸⁾。この場合には「それほどおいしくない」のような思念が暗示されていると日本人は理解する。ただし、このような「は」は日本人でも自覚して、明示的に使うばかりではないようだ。だれかが「これ、悪くないね」と発言した後、「あなたはこれがいいと思うのですか」と追求され、「いや、悪くはないと言っただけで、いいと思っているわけではない」という具合に言葉とそれが表す考えを巡って揉める場合も少なくない。

外国人学習者は当然文法に従い、明確な日本語を使おうとするのだが、言葉の字義通りの意味だけでなく、それと対比される内容をごく軽い「合図」で暗示する、このように曖昧な日本語の伝達法を的確に使うことは極めて難しい。作文中で使われていても、十中八九「まずくなかった」のヴァリエーションとして記憶していたものをただ真似ているだけで、含意、暗示を意図しているとは思えない¹⁹⁾。このような「は」の使い方は情報伝達、表現、レトリックの問題と交錯し、文法の枠内に収まりにくい²⁰⁾。

「は」は自覚的、表現的に使われる反面、無意識に曖昧に使われることも多い。「ではない／ではありません」の「は」は本来、先の「対比」、あるいは「暗示」の意をはっきりと持っていたのだろうが、現在これが「は」を含まない「でない／ありません」と比べた上で選ばれているとは思えない。日本語教育ではほとんど規則のように、「だ／です」を否定文にすると「ではない／ではありません」になると簡単に扱う。そうして問題がないほど本来の意味合いは意識されなくなっているのだろう。何かを暗示していたものが、他のことも考えた上で否定しているのだという態度を表明するだけで、表現を穏やかで、丁寧にするだけのものに変わり、ついにはそれが零度のスタイルになってしまうのだろう²¹⁾。

4. おわりに

本稿では作文の添削、書き換えに関わる思考がどのくらい広がるかを見てきた。中には余談と見えるほど元の言葉、書き換えから離れていく場合もある。しかし、言語が様々な

様相を持ちながらも一つの体系であり続けると思えば、解釈を積み重ね、一つの言葉の分析から隣接する言葉の分析へと次々に渡ってゆき、一見遠く離れたところに行ったとしても、繋がりがなくなってしまうわけではないと確信できる。

外国人の使う日本語に現れる異常の原因についても同じだ。一つの要因からいろいろな異常が出現するかと思えば、一つの異常が出現する背後にいくつもの要因があったり、原因と思えるものの向こうにさらにその原因が何層も重なっていたりする。作文のフィードバックを単なる書き直しや文法の公式的な解説だけにとどめていると、異常のさまざまな要因、奥深くに隠れている原因に触れることができず、問題を解決するせっかくの機会を逸すことになりやすい。

本論で見た例の中には言葉の表層の論理構造、字義通りの意味から外れるものが多かったが、そのようなものは本来、文法の枠に収まるものではない。感覚や主観など、不確定要素に関わる言葉の問題を考えるには、拘束の多い文法の視点だけではなく、修辞学、記号学など、隣接領域の視点から見ることでも必要だ。

添削する者がその文章に対して第三者的な立場をとらず、言葉を向けられた当事者として読むなら、その資格で主観的な発言は許されるだろう。

学習者の中には間違いを指摘されること、書き直されることに強く抵抗を覚える者もいる。外国語であっても言葉は人格の表層と感じられるだろうから、そういう反応も当然と言えば当然だ。しかし、作文練習は間違えてはいけないものではない。間違えずに使えるようになるための練習なのだから、理解の不足しているところはそれが明らかとなるように間違えているほうがいいぐらいだ。そう納得させるためにも、たった一つの間違ひの分析から自分の日本語学習の傾向、日本語能力の問題を考える機会を与えたい(了)

- 1) 中川正弘、「作文」を「読む」／「書く」技能の位置づけと展開、広島大学留学生日本語教育、第4号、1992年
中川正弘、作文の誤りと文体、広島大学留学生センター紀要、第3号、1993年
中川正弘、作文と解釈行為、広島大学留学生センター紀要、第4号、1994年
中川正弘、外国人の日本語、日本人の日本語 一言葉の問題から教授法の問題へー、広島大学留学生日本語教育、第6号、1994年
中川正弘、作文の添削と文体差、広島大学留学生日本語教育、第7号、1995年
中川正弘、「は／が」と助詞選択の零度、広島大学留学生日本語教育、第8号、1996年
中川正弘、添削文が語る日本語のスタイル(1)完了表現と時制、広島大学留学生教育、第1号、1997年
中川正弘、添削文が語る日本語のスタイル(2)言葉の選択と序列、広島大学留学生教育、第2号、1998年
中川正弘、スタイルから見た日本語文法、広島大学留学生センター紀要、第10号、2000年
- 2) 「文体」という言葉はどうしても書かれた言葉、あるいは文章を書くことだけに限定されてしまう。会話や、書く前の思考における言葉の形式や様態を含めて考察するため、本論では「スタイル」と

いう言葉を使う。

- 3) 私はヨーロッパに住んでいる時、
「ヨーロッパ人の話し方はおかしいですね」と思いました。(×)
ヨーロッパ人の話し方はおかしいと思いました。(○)

このような直接話法とも間接話法ともつかない書き方をする外国人は少なくない。日本語でのモノログ(内言語)をです・ます体まじりで行っているか、日本語ではモノログを行っていない(母語から翻訳するだけ)ということだろう。

スタイルから見た日本語文法、広島大学留学生センター紀要、第10号、2000年、p.12参照。

- 4) 「できるー可能な、安定したー不安定な、あるーない、同じー似ているー違う、いけないーよくないー悪い、いけるーおいしい、細いー痩せている、滑らかなーすべすべしている、変わったー変な、・・・」

また、形容詞の反意語が名詞となるものもあり、この種の語彙をイ形容詞／ナ形容詞に並べて扱うほうがいいのではないかとも思える。

「特別なー普通の、有名なー無名の、・・・」

- 5) 例えば、人並みに、あるいは人並み以上に外国語を使える日本人が自分は「まだまだ下手」だと謙遜するとき、文字通りに受け取る日本人はあまりいないだろう。そのような場合、使われた言葉の意味だけではなくその人物について知っているすべての情報を参照し、「この人は謙遜している。謙虚な人だ」と理解する。ここでは「私は謙虚です」というメッセージを発信しているとも言えよう。日本語で多用される「ほのめかし」は行動様式、道徳という文化コードから見ても興味深い問題だが、言葉の使い方の問題として、文法と修辞学に深く関わっている。

- 6) 外国人が「私たちはよく教科書を読みます」と作文に書いているとき、どこにも文法の間違いないので、書き直さなくていいと考える添削者は多い。これを読めば、日本人は「よく」は「何度も」とか「長い時間」と理解する。日本人の使った日本語ならそれですむのだが、外国人の日本語の場合、そのような内容ではない可能性がある。「よく」の語源に近いもう一つの意味、「上手に」のつもりで使っているような例が多いのだ。

また、たとえ日本人がこれを読んで、「私たちは上手に教科書を読みます」という意味かもしれないと思っても、自分のことをはっきりと「上手」だと考えるはずはない(この人は謙虚な人だから)と考え、やはり「何度も」か「長い時間」という意味だろうと結論する可能性もある。真実は書いた本人に聞いてみなければ分からないのだが、実際そこまでの者はあまりいないだろう。

外国人の日本語では、一目でそれと分かる間違いもあるが、表面的に言葉だけを見れば、どこにも間違いのない正しい日本語のようでありながら、実はその背後で思考内容と言葉の結び付きが間違っていることがよくある。

- 7) **スタイルから見た日本語文法**、2000年、p.6参照。

- 8) 大野晋、**日本語練習帳**、岩波新書、1999年、p.90でも文章を書く際の「心得」として上げられている。そこで断定の多い文章の例がいくつも反面教師として紹介されているが、そのような文体が日本語として間違っていると言われるわけではない。

- 9) 例えば、できるだけ丁寧な言葉遣いをしようとするときは「ので」が零度にあるスタイル、ぞんざいな言葉遣いで構わない場合、です・ます体でも明確に発言しようとする場合は「から」が零度にあるスタイルを選ぶだろう。

外国人留学生と日本人学生がいっしょに学ぶ授業で外国人の日本語と日本人の日本語について分

析、解釈をしたとき、筆者が「ので」よりも「から」を強く感じるというと、一人の日本人学生が逆に「から」より「ので」のほうが強く感じると意見を述べたことがある。「強い」というのは主観的な判断なので、どちらが強いと感じられても不思議はないのだが、よく聞いてみると、日常の日本語使用で「から」を零度として使っていると、使うことの少ない丁寧体を使うとき、しゃっちょこばった感じがする、つまり緊張度が高く、堅くて強いスタイルと感ずるのだと分かった。

10) 元の作文 「日本のテレビ」

日本は私の国と比べて、テレビのチャンネルが多いと言える。私は1カ月ぐらい前、友だちがテレビをくれたから、よく見ていた。実は、チャンネルは6つあるので、いろいろな番組の中で選べるのだ。ドラマ、クイズ、スポーツなどで好きなことはたくさんあると思う。日本語を練習するため、一番いいのは、ニュースだと思うが、まだ少し難しいと思う。一番難しいのは、歴史的な映画だと思う。こんな時代の話し方は今より違うのだ。

クイズは楽しいが多くの場合はあまりわからないのだ。現代ドラマは、話しがいつも同じなので、わかりやすくなってしまった。

楽しむのため、外国語会話の番組を時々見ている。くつろぐためには、外国の映画は、テレビに二語システムがついているので、いつも原語版で見ている。

文句は一つあるが、コマーシャルが多すぎると思っている。

11) 理由の「で」と同様に、条件で使われる「と」はそれ自体でこの意味を持っていると考えるのではなく、並置された二つの節の結び付き自体が「条件」を表しており、「と」はその関係を支えているだけと考えたほうがいだろう。

12) 「降ったならば／降ったなら／降るならば／降らば」のような古い語形は日本語から消失したわけではない。今でも読まれる古い書物に残っているだけでなく、現代の歌曲、詩などにおいても使われることがあり、まだ現役だと見なせなくはない。多くの日本人にとって自分で使うことはないにしても、潜在的なスタイルの選択肢として日本語能力の一部であり続けている。「たら／なら／ば」の選び方について考えるとき、これら日常生活で使うものを普通は使わないが記憶され続けている古いスタイルと比べることで見えてくることのあるのではないだろうか。

例えば、「たら」の「た」が完了を表す成分であることなども古いものを見たほうがよく分かる。こういうことを知っていれば用法、使い分けが理解しやすくなるはずだが、どうしてか、文法の解説においてそのような指摘、言及を目にしない。

13) 初級を教える人のための日本語文法ハンドブック、スリーエーネットワーク、2000年、p.144、コラム『ことばのゆれ』。

文法研究は客観的事実の分析を行っているように見えるが、分析される用例はすべて主観的に言葉を使う人間のものであり、それをかなり抽象することになる。また、文法研究がその言葉の教育にフィードバックされるとき、別に学習者の中に客観的な言語システムを構築しようとするわけではない。個々の主観的に言葉を運用できる言語使用者を作ることが目指されているのだから、言語の主観に関わる領域は黙殺すべきではなく、客観的事実とは峻別したままその限りにおいて視野に入れ続けるべきだ。

統計結果には「ことばのゆれ」が出るだろうが、個々の言語使用者がその言葉を使う瞬間において選択がゆれることはまずない。

14) 中川正弘、添削文が語る日本語のスタイル(2)言葉の選択と序列、広島大学留学生教育、第2号、1998年、p.8参照。

15) 例えば、ふりがな英和辞典(研究社)

「because — (なんとすれば)…だから; …だからと言って…」とあり、「ので」は出されていない。

「but — しかし、けれども…」で「でも/が」は出ていない。

「in — の中に, …に」では「の中に」が最初に出る。

「if — もし…ならば; …」では「たら/なら/ば/と」は出ていない。

16) 「ひとつ走りする/ひと泳ぎする/…」のように動詞を名詞化して使うのは名詞なら冠することができる意味要素を付加したい場合だけのようだが、何も付けずに名詞化して使うことが禁じられているとまでは言えないだろう。ただ使われていないだけだ。

17) 「形容詞に『です』を付ける言い方は、第二次世界大戦後になるまで、標準的なものとは認められない傾向があった。国語の教科書でも、『広いです』を避けて『広いのです』、『広うございます』などを使う方針がとられていた。しかし、『広いです』の言い方が盛んに使われ、だんだん耳慣れた形になってきた。そして、1952(昭和27)年に国語審議会から建議された『これからの敬語』の中で、ようやく『平明・簡素な形として認めてよい』と公式に認知された形になった。【日本語教育辞典、p.127】

公式に認知されたからといって言語感覚における抵抗が払拭されるわけではない。書物として蓄積された過去の言語文化の多くがそのような感覚を反映し、これを消極的にしか使っていなければ、それを読んで言語経験を積む現代の日本人も正しい文法と感じつつ、できるだけ避けようとし続けるだろう。

これが受け入れにくいのは、下に見るのように、だ・である体で名詞、ナ形容詞は「～だ」と使っても、イ形容詞では使われないこと、また、完了形において「たです」のように完了要素が「です」に先行してしまい不安定と感ぜられるからだろう。それなら、外国人の日本語によく出現し、かつて日本語の教科書の中にも存在したと聞く「まずいでした」が好まれるかと言えば、だ・である体で「まずいだった」となるのには抵抗があり、同様に不安定と感ぜられる。

このようになるのは、結局です・ます体で話したり、書いたりするとしても、「まずい/まずかった」の形が日本人には内言語のスタイルとして常に潜在し、揺るがないためではないだろうか。

・料理です (○) きれいです (○) まずいです (○/△)

・料理だ (○) きれいだ (○) まずいだ (×) まずい (○)

・料理でした (○) きれいでした (○) まずいでした (×) まずかったです (○/△)

・料理だった (○) きれいだった (○) まずいだった (×) まずかっただ (×) まずかった (○)

18) 「が」が強調的な指示、「は」が普通の指示、つまり弱い指示と感ぜられる一方、「まずくはなかった」の「は」は強調と感ぜられる。すると、弱いものが強調するというところで強弱における矛盾があると見える。しかし、強調は弱い要素によっても起こりうる。

A ●●●●● (弱弱弱強弱弱弱) B ●●●●● (強強強弱強強強)

標準というものが成立している場合 (A も B も)、その連続に起こる「変化」、「転調」は弱いものによって引き起こされていても「強調」と感ぜられる。文章中で引用文がポイントを落として小さくされていても「強調」と感ぜられるのはそのためだ。

19) 「まずくなかった」が字義通りの情報を伝えるだけなのに対して、「まずくはなかった」と「は」が付加されると、表された言葉と対比されるような思いが何か暗示される。

「は」の用法で対比と言うと、構文における規則のように、つまり、対比的な内容の句や文（ここでは「おいしくもなかった」のような句）が後に続いていなければいけないかのように説明される。しかし、対比自体は「まずくなかった。しかし、おいしくもなかった」と言っておかしくないことから分かるように、「は」は必ず出なければいけないわけではなく、そのような構文で出やすいというだけだ。「は」が使われなくとも構文が対比を表せば、それで全体の文意は同じになるからだ。

すると、対比のために使われる「は」が、後に対比内容が続かない場合、そのような内容を含意、暗示することもあると考えるのではなく、それだけで対比内容を含意、暗示する「は」が使われた後に、そのような内容が明示されることもあると考えるほうが合理的ではないだろうか。

20) 「まずくはなかった」が対比関係によって隣接する思念、「おいしくもなかった」を表すと考えれば、これは隣接するものを表す修辞技法の「換喩(metonymie)」に並ぶ。また、「まずくはなかったが、おいしくもなかった」が何度も繰り返され、習慣化されることによって単一性を獲得していると見れば、これを全体として「まずくはなかった」という部分が表す「提喩(synecdoque)」型の修辞技法と見える。

21) 日本語の助詞の使い方には文法として扱われているが、含意、暗示という字義通りではない意味作用を持つと思えるものがいくつもある。

- ・お茶をいただきます。お酒はいいです。【→いただかなくてもいいです。】
- ・ここから駅まで20分はかかります。【→20分は確実です。】
- ・11時までには来てください。【→11時を過ぎると困ります。】
- ・コーヒーでも飲みませんか。【→他の飲み物でもかまいません。】